
Blue_Destiny

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B l u e
| D e s t i n y

【Nコード】

N 5 6 4 3 G

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

異なつた惑星の、そこに生きる生物たちの、運命の擦れ違いを、立場を変えて書いてみました。

奇跡の星

その星を、我々は「奇跡の星」と呼んだ。

オレンジに輝く恒星を見つけた時は、ごく普通のルーティンワークに過ぎなかった。そして、惑星を持つことが分かった時は、仕事の量が増えるという印象でしかなかった。

だが、この星系がハビタブル・ゾーン、すなわち生命生存可能領域を持っていて、その領域に惑星が存在することが分かるに至って、我々の仕事は膨大になったが、同時に我々の興奮がその辛さを打ち消した。

人類は恐ろしい発展をしていた。それは悪魔と形容しても良い程のものだった。

超空間航法の発明により宇宙への進出を容易にした。太陽系内は、ずい分前から人類の庭と化していた。その機動力を存分に使って、太陽からは無尽蔵のエネルギーを取り出し、地球には月までの軌道エレベータを設置し、火星をプラネット・フォーミングし、金星を浄化・減圧化して居住可能にした。更に、カイパーベルトから資源を取り出し、資源採掘の為に木星と土星のサイズを1/3にしてしまった。

それでも、人類の欲望は抑えられなかった。423億の人口を数える人類を支えるには、太陽系は、あまりにも小さくなってしまった。そこで我々は、資源と居住を求めて星域探査の任務を帯び、6年前に地球を出発したのだった。

我々は、その星への接近を開始した。近づくにつれて、その星の実体が明らかになってきた。

この星を見た時、誰もが信じなかった。信じられなかったのだ。

その星は、大陸には青々と茂った植物に包まれ、海にはどこまでも透明な水を湛えていた。そして、白い雲が美しく流れていた。

美しい、青い星。

かつて、地球もそう形容されていたと、古典で学んだことを思い出した。

地球は、完全に人工管理されていた。

地質は完全に改良され、海は均一の深度になり、地殻内部の、マントルさえもその密度、温度、流体性質までが制御されてしまっていた。大気はコンディショナーで制御され、天気は予測でなく予定となっているのだ。

だが、この星は全てが「天然」なのだ。生まれたままの姿、自然の姿、それは我々も初めて目にしたものだ。観ているだけで自然の畏怖を感じて、手が震えてくるのだ。

我々は、この惑星を「ブルー」と名付けた。

「ブルー」の周回軌道に宇宙船を載せて探査するうちに、かすかな電波を観測した。

その電波の解析を始めたのだが、非常に高度な暗号化が施されていて、我々の船の能力では容量が不足したので、超空間通信でデータを地球に送った。地球から送り返された解析結果は驚くべきものだ。だった。

「私達は貴方達の来訪を予期していました」

「それは、1億6千年前からのことです」

「ただし、コンタクトは1度だけ」

「その後は、速やかな退去を望みます」

それはコンタクトを示唆する内容だった。そして、ランデブーする地点の、惑星の座標を示していた。

しかし、そのメッセージの内容は実に微妙なニュアンスだった。我々はその真意を図りかねていた。

だが、地球からの業務指令は「接触せよ」とのことだった。

我々は、指令に従う他はない。

上陸舟艇の準備を開始し、コンタクトチームが選任された。

コンタクトチームに選ばれた乗組員は、まるで天下を取ったような振る舞いをした。

それもそのはずだ。我々は一度も惑星に降りたことが無いのだ。

そう、我々は勿論、地球生まれではない。

選ばれた人々しか、地球では住めない。それは「神」と呼ばれる人々のことだ。

火星や金星、月やタイタン、ガニメデのような、星の上で生まれる人々でもスーパーエリート達だ。

我々のような軍人階級でさえコロニー生まれだ。

ワーカーはステーションや小惑星生まれが普通だ。

だから、星に降りること自体が凄いことなのだ。

初めての惑星の大気圏飛行は快適だった。明るいい色で彩られた眩しい世界に感じられた。

指定された座標に、上陸舟艇は静かに着陸した。

そこは、風がそよぐ草原だった。隊員全員がしばらく、その風景に見惚れた。

ピンクや赤、黄色の花が咲き乱れ、美しい緑の絨毯がどこまでも続いていた。

遠くの山は青く霞み、海と空の境目が分からなかった。

その星に降り立った時、我々は不恰好だった。

スペーススーツがいかにも不似合いかを思い知らされる程、美しい星だった。

wikiで見たものが、今現実にも目の前にある。

我々は知識でしか知らないことばかりだ。

だから、それを信じる事が出来なかった。

だから、スペーススーツを脱ぐことは出来なかった。

それが我々の常識だった。

しばらくすると、木立の影から人影が現れた。

白い布をまとった数人の人間が、我々の前まで来て立ち止まった。外部マイクに切り替えると、白い布をまとった人々の声が流れてきた。

「ようこそ」

白い布をまとった人々が話すその言葉は、聞きなれたものだった。太陽系内でもなかなか聞かれない程、実に美しい発音の太陽系標準語だった。

「だが、不幸な出会いでした。予測されていたこととはいえ…」

白い布をまとった彼らは、どこか悲しげな表情が見えた。だが、すぐにその表情は消えた。

「私達は、貴方達を受け入れることはできない。これ以上の接触はご遠慮いただきたい」

我々は釈然としなかった。どうして、彼らは我々を拒否するのか。「どういうことなんです？ 我々はまだ、この星には何もしていないのに」

彼らは、また悲しげな表情をした。

「私達は、それが受け入れられないのです」

そう言つと、彼らは背を向けて立ち去り始めた。

我々は慌てて呼び止めた。

「どうしてなんです？ 理由を、その訳を教えてください！」

彼らは振り返って、静かに言った。

「胸に手を当ててみてください」

彼らは、首を傾げて微妙な微笑をした。

「でも、それでは分からないかもしれない」
それから、履き捨てるように言った。

「間もなく嵐が来ます。その前に飛び立たれるがよい。さもないと命を落とします」

そして彼らは、去って行った。

我々は納得できなかった。せめてもと上陸舟艇の周りを探索した。

しばらくすると、辺りが急に暗くなってきた。そして、スペーススーツのフェイスプレートに水滴が付いた。

「ん？ 何だ、これは？」

見る見るうちに、液体が空から落ちてきた。そして、異常電圧を感知したスペーススーツが警告を発していた。

次の瞬間、爆音と共に、空から白い輝く閃光が上陸舟艇とコンタクトチームを襲った。

上陸舟艇は雷の異常電圧で静電破壊されて爆発炎上し、コンタクトチームの各隊員はスペーススーツへの直接の落雷で感電死した。

我々は不幸だった。天気を知らなかったのだ。

この事態に慌てた軌道上の探査船は、地球への超空間通信をしようとした矢先に、惑星「ブルー」からのスプライトで、動力を破壊され航行不能の事態に陥った。

更に、スプライトの影響で惑星軌道周回速度が鈍化、惑星ブルーに落下する羽目になり、36時間後に大気圏で燃え尽きた。

その後、地球は2度ほど、この惑星「ブルー」に搜索を兼ねた探査船を派遣したが、いずれも音信不通の遭難という結果だった。

地球は、惑星「ブルー」を封印した。

惑星「ブルー」は幻の星になった。

奇跡の星・惑星「ブルー」

ん。
自然の心を持つ貴方なら、
行き着くことが出来るかも……知れませ

奇跡の星（後書き）

久しぶりの投稿です。
感想をいただければ幸いです。

Planet Fate

我々は管理されているのかもしれない。

「運命」というシロモノに。

我々の惑星は美しい。

大地は緑の木々が生茂り、海は深い藍色を湛え、空は高く青々と澄み渡っていた。

大いなる大気の循環が、海を蒸発させ、雲を作り、雨を降らせる。大いなる水の循環が機能し、降った雨は大地を削り、川は流れ、海流は流れ、季節を作り出していた。

植物は大地のほとんどの繁茂し、動物もまた、大地のほとんどを闊歩した。

ありふれた生態系の中で、我々は生活している。

我々は狩猟をし、木の実を集めて暮らす。

それ以外には認められていない。

だが、決して飢えることは無かった。

それで十分だった。

我々は『文明』という果実を、口にする必要がなかったのだ。だからなのだ。

「運命」が我々に目を付けたのは。

我々は文字を持たないが、言葉は獲得した。それも「運命」が仕向けたのかもしれない。

いつしか、我々は「声」を聞くようになった。

我々の祖先は代々、その「声」の言葉を何百世代と語り継いで来

たのだ。

それはこのことの為だった。

我々は「運命」から仕事を託ったのだ。

それはこうである。

「我々は只の1度だけ『訪問者』と接触する」

只それだけなのだ。

それが、与えられた唯一の仕事だった。

語り継いで来た事柄の通りに、宇宙から「訪問者」がやってくる。
星のような輝きのモノが、我々の惑星を巡るようになる。

それが「訪問者」の乗り物なのだ。

その乗り物に、我々は念じるのだ。

「私達は貴方達の来訪を予期していました」

「それは、1億6千年前からのことです」

「ただし、コンタクトは1度だけ」

「その後は、速やかな退去を望みます」

しばらくすると「訪問者」の乗り物から銀色のモノが舞い降りてくる。

銀色のモノが地上に降りると、その銀色の中から、ヒトの形をした、

だがヒトとも思えないモノが出てくる。

それに我々は、こう語りかけるのだ。

「ようこそ」

「だが、不幸な出会いでした」

「予測されていたこととはいえ…」

「私達は、貴方達を受け入れることはできない」

「これ以上の接触はご遠慮いただきたい」

そして、我々は彼らから去っていくのだ。

彼らは、我々に質問を浴びせかけるが、答えも既に語り継がれている。

「私達は、それが受け入れられないのです」

「胸に手を当ててみてください」

「でも、それでは分からないかもしれない」

そして、最後に必ずこう言い残すのだ。

「間もなく嵐が来ます」

「その前に飛び立たれるがよい」

「さもないと命を落とします」

だが、彼らは我々の言葉に従うことはほとんど無かった。

彼らは、大いなるイカズチによって、必ず命を落としてしまっただった。

こうして何千、何万と繰り返し来た仕事。

空しさを覚える時もあるのだが、我々はいつまでも覚えてはいなかった。

というのも、世代交代が早いのだ。

1世代で1回の仕事を経験する程度なのだ。

語り継がれた仕事をするが我々の使命。

まだまだ、語り部の話は終わらない。

安住の地である我々の惑星を、我々は「青」と呼んでいる。

我々の惑星「青」がいつまでも、このままであり続けるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5643g/>

Blue_Destiny

2010年10月8日14時44分発行